中学校　英語科　部会

部会長　糸田中学校　校長　奥　浩幸
実践者　糸田中学校　教諭　福田　和憲

1　研究主題

必要に応じた思考・判断・表現を生む言語活動
～表現したいと思わせる場面設定を通して～

2　主題設定の理由

田川郡教育研究所の研究主題にも示されているように、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることが現在の教育に課された使命であり、そのために「言語活動の充実」が求められている。外国語科の授業においては、言語材料（語句や構文など）を活用し自分なりの表現を思考するような言語活動が各単元内に位置づけられることが必要であると考える。

そのためには、生徒が表現したいと思うような場面設定の工夫を行いたい。「知りたい」や「伝えたい」という気持ちを持たせることで、言語材料を使う必要性が生まれるからである。必要性が生徒の思考や表現をより豊かでより実用的なものにすると考える。

3　主題の意味

(1) 必要に応じた思考・判断・表現とは

定型句を使ってのパターンプラクティスも言語材料の習得においては必要な活動である。しかし、実際の言語の使用場面に対応するにはさらに１段階進んだ言語活動が必要であると考える。状況の変化や、自分の持つ情報量の変化に合わせ、その時に最も必要な情報を伝えたり、得たりするための言語活動である。

授業で得た知識・理解を活用し、必要に応じた表現をするための試行錯誤を繰り返すことで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めることができると考える。

(2) 言語活動とは

言語活動とは思考力・判断力・表現力を高めるために全ての教育活動を通して行われる活動である。平成２０年の中央教育審議会答申には６種類の活動が示されている。外国語科ではどの活動も非常に重要なものであるが、今回はその中で３番目に示されている「概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする」活動に焦点を当てたい。

ある言語材料について単語や語順を理解し、どのような内容を表現するのに有効かを考え、実際に活用させる活動を授業内に仕組むことで、言語材料を習得させるとともに、その言語材料を用いた思考力・判断力・表現力を高めることができると考える。

(3) 場面設定とは

言語材料の習得には、インプットとアウトプットの活動が関連して行われる必要があると考える。単元全体を通して１つの課題を設定し、問題解決的な学習を仕組むことで、単元序盤の暗記などの作業が単元後半の表現活動と結びつく。これにより生徒はそれぞれの活動に必要性を感じて取り組むことができると考える。これは

単元全体を貫く大きな場面設定である。

今回は疑問形を扱う授業内での小さな場面設定に焦点を当てる。班対抗のクイズ形式にすることで、正解にたどり着くためにより有効な情報を得ための疑問文を考える必要性が生まれる。

4　研究の目標

生徒が表現したいと思うような場面設定をすることで、知識・理解を活用した思考を促し、より豊かな表現へと高めていく。

5　研究仮説

学習過程において、次のような手立てをとれば本研究の目標が達成できるであろう。

・本時のめあてへと生徒の意識を向けさせるために、導入で毎時行っているフラッシュカードと Q&A でのウォーミングアップの中で既習の言語材料について確認する。

・本時の活動の流れを理解させるために、展開の前段で教師によるデモンストレーションを聞かせる。

・有効な情報を得るための質問を意識させるために、例題を用いて Does を用いた質問を考えさせる。

・Does を用いた疑問文に習熟させるため、生徒の発話後に適宜修正を加える形成的評価を行う。

6　授業の計画

(1)単元　Unit6 ベッキーのおばあちゃん　(New Horizon English Course 1)

(2)単元の目標及び指導計画

単　元	Unit6　ベッキーのおばあちゃん	総時数	9時間	時期	11月
単元の目標	○三人称を用いる言語活動に参加しようとしたり、コミュニケーションを継続させようとしたりしている。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ○三単現の s を用いた肯定および否定の平叙文を利用して、有名人の紹介文を作ることができる。 ○Does を用いて第三者について質問したり答えたりすることができる。【外国語表現の能力】 ○三人称を用いた英文を読んだり聞いたりして、内容を理解することができる。【外国語理解の能力】 ○新出単語や言語材料の構造を理解し、正しく運用できる。【言語や文化についての知識・理解】				

次	学習活動・内容	指導上の留意点	観点・主な評価規準
	自分の好きな有名人を紹介しよう。		
	教師による紹介分のモデルを聞く “This is Ichiro.” “He is from Aichi.” “He lives in America.” “He plays baseball.”		

第 1 次 (2)	“He likes curry and rice.” 1　三単現のｓの使い方を知る。 (1) 動詞の変化に慣れる。 (2) 主語による使い分けを知る。 (3) 紹介したい有名人について考えさせる。 2　有名人について紹介文を書く。 (1) 教科書ｐ50・51で三単現のｓを含む紹介文を読み取る。 (2) 紹介文を書く	○変化する部分の色を変えることで変化をわかりやすくする。 ○次時に紹介文を書くことを伝え、出身地や好きなもの、嫌いなもの、するスポーツや楽器について情報を集めておくように指示する。このことで次時をスムーズに行う。 ○教科書の本文に類似した文章を使い、三単現のｓの使い方を確認させる。 ○空欄補充の形式にすることで、文章を書きやすくする。	・動詞の変化がわかる。【知識・理解】 ・主語による動詞の使い分けがわかる。【知識・理解】 ・動詞を適切な形で書きこむことができる。【知識・理解】 ・三単現のｓを用いた文を２つ以上書くことができる。【表現】（確認テスト）
第 2 次 (2)	**否定文を使って紹介文を増やそう。** 1　doesを用いた否定文の形を知る。 2　紹介文を書き足す。 (1) 教科書ｐ54・55でdoesを用いた否定文を含む紹介文を読み取る。 (2) 否定文を使い紹介文を増やす。	○肯定と否定の文を比べることで動詞が原形になることに気付かせる。 ○並び替え問題で、語順に慣れさせる。 ○本文に類似した紹介文を使うことで、否定文の内容を読み取る練習をさせる。 ○例文を参考にさせることで、動詞の変化に気をつけながら作文させる。	・否定文の語順がわかる。【知識・理解】 ・doesを用いた否定文の意味を理解することができる。【理解】 ・doesを用いた否定文を１つ以上書くことが出来る。【表現】（確認テスト）

	Doesを使って質問し、新しい情報を得ることができるように		
第3次(3)	1　doesを用いた疑問文と答えかたを知る。 2　教科書p52・53でdoesを用いた疑問文を含む会話文を読み取る。	○平叙文と並べて書くことで、疑問文の語順を確認させる。 ○本文に類似した会話文を使うことで、Doesを用いた応答の内容を読み取る練習をさせる。	・疑問文の語順がわかる。【知識・理解】 ・doesを用いた疑問文の意味を理解することができる。【理解】
本時(7/9)	3　doesを用いて、質問したり答えたりする。 (1) 質問の仕方と答え方を確認する。 (2) 先生当てクイズを行う。	○確認テストでの間違いを取り上げ説明することで、間違えやすい表現について確認させる。 ○班対抗のクイズ形式にすることで、より有効な情報を得るためのDoesを用いた疑問文を考えさせる。また、他班の応答を理解する必要性を持たせる。	・doesを用いて質問したり、答えたりすることができる。【表現】 ・各班の問答を聞いて、英文の内容を理解することができる。【理解】
	Joelに好きな有名人を紹介しよう。		
第4次(2)	1　班で発表の準備をする。 (1) 紹介カードを作る。 (2) カードを回し、他の班員が訂正や意見を書く。 (3) 訂正し発表練習をする。 2　Joelに紹介する。 (1) 紹介カードを使って紹介する。(添付資料2を参照) (2) 友達のShow&Tellを聞き取る。	○紹介するという目的を持たせることで、絵やイラストを使ったわかりやすいカードを作らせる。 ○訂正の時間をとることで、自信をもって発表できる文を作らせる。 ○Joelに伝えるという場面にすることで、声量、視線、語と語のつながりや、ジェスチャーなどを意識して発表させる。 ○友達の紹介文を聞き取るという目的をもたせることで、メモを取りながら正確な情報を聞き取らせる。	・3人称を用いて紹介文を書くことができる。【表現】 ・内容を伝えようと工夫している。【意欲・関心・態度】 ・友達の発表について内容を正確に理解できる。【理解】

7　指導の展開

	学習活動・内容	指導上の留意点	評価	配時
導入	1　ウォーミングアップ及び復習を行う。 (1) フラッシュカード (2) Q＆A “Doraemon, does he like dorayaki? ”など 2　めあてを確認する	○声を出しながら単語練習と、前時までの復習を行うことで英語の授業への意欲を高める。 ○Q＆Aから続けて既習事項の復習をすることで、本時の内容へと生徒の意識を方向づける。		１０
展開	めあて　　does を使って名探偵になろう。 授業後の子どもの姿 情報を得るために必要に応じて does を用いた質問ができる。 3　口頭練習を行う。 (1) 教師によるデモンストレーションを聞く “Does he live in Tokyo?” →”Yes, he does.” “Does he like curry and rice?” →”I don’t know. He likes dorayaki.” “Does he like mouse?” →”No, he doesn’t.　But he likes mi-chan.” (2) 例題で does を用いた質問の練習を行う。 “Does she like music?” →“Yes, she does. She is a singer.” “How old is she?” →“She is 20 years old. “Is she Kyarypamyupamyu?” →”Yes, she is.” 4　先生当てクイズを行う。 (1) １班から順に質問をし、クイズの答えとなる	 ○デモンストレーションを聞かせることで、本時の活動の具体的な流れを理解させる。 ○例を使って本時の中心となる疑問文の練習をさせることで、より有効な情報を得るための質問を意識させる。 ○例を用いることで No と答えた後には１文補って答えることを知らせる。 ○適宜訂正を加えた疑問文を生徒の発話後に添えることで、Does を用いた疑問文に習熟させる。	

	先生を推理する。（クイズのルールは資料１に記載） “Does he likes music?” →”Yes, he does.” “Is he Mr. Fukuda?” →”No, he isn’t.”		【表現】	
終末	５　学習のまとめをする。 (1) 学習した英文を再度口頭練習する。 “Does he like soccer?” (2) 確認テストをする。 （Does を用いた会話文を聞き、誰について話しているのかを答える。） “Does he play soccer?” “No, he doesn’t.　But he plays the guitar.” “Does he sing, too?” “Yes, he is a famous singer.”	○全体でもう一度 does を用いた疑問文を確認する。 ○確認テストを点検することで、到達状況を把握すると共に、理解のできていない部分については次時に再度復習を行う。	・Does を用いた会話を聞き、その内容を理解することができる。 【理解】（確認テスト）	5

資料１　クイズのルール

・教師が選んだ人物カードに書かれた人物の性別と誕生月を紹介してから、ゲームがスタートする。
“This is Mr.(Ms.) X.”　“His(Her) birthday is in July”

カードには当中学校職員の名前と以下の項目が書いてある。

人物カードの項目		
・住んでいる市町村	・好きな食べ物３つ	・嫌いな食べ物３つ
・年齢（曖昧な表現も可）	・する（経験のある）スポーツ又は楽器３つ	
・兄弟姉妹の人数	・飼っているペット	

・回答班は１つ質問をする。
Does (s)he live in ~ ?
Does (s)he like ~ ?
Does (s)he play ~ ?
Does (s)he teach ~ ?（この質問は３周目以降しかできない。）

・教師は人物カードの情報を基にして、質問に答える。

・教師の回答を聞き、クイズの答えの先生を予想し質問する。外れると回答権が次の班へと順に移っていく。

・人物予想が当たったら、回答班は正解ポイント（その問題での、累計質問数×１０点）

例	：１問目、最初の回答班と、次の班が人物予想をはずし、３つ目の班が人物を当てた場合正解した班は３０点を得る。 ２問目の解答権は１問目に正解した班の次の班から順に回っていく。

・時間がきた時点で終了。その時点で最も得点の高い班が優勝。

8 研究のまとめ

(1) 本時の内容について

展開の主活動においては生徒が積極的に参加する様子が見られた。こちらが準備した情報に留まらず、「眼鏡をかけていますか。」や「白い車を持っていますか。」という質問を考えるなど、より正解に近づくために有効な情報を得ようと試行錯誤する様子が見られた。時間内にはクラスの２４人中２１人（８７．５％）が英語で疑問文を発表することができた。また、そのうち Does を用いた疑問文を正しく活用できた生徒は１４人（５８．３％）であった。ただし、「眼鏡」や「(眼鏡を）かける」といった単語がわからず、その場で教師が補助する必要があった。

終末段階に行った確認テストでは、英語での会話文を聞き誰について話しているのかを３択から選ぶ問題を出した。正解を得た生徒は２３人（９５．８％）であった。このことから Does を用いた疑問文を含む会話文を聞いて、ほとんどの生徒が内容を理解することができたと考えられる。

(2) 研究の目標について

今回は質問をして情報を引き出すことで、先生を当てるという班対抗のクイズ形式をとった。生徒によって部活動や委員会活動で関わる先生が異なり、知っている情報が異なるため、それぞれの班にとっての有効な情報というのも違ってくる。またクイズが進むにつれて、明らかになった情報が増えるので次に必要な質問も変化することになる。このことが、生徒に状況に合わせた質問を考える必要性を与え、活発な活動に結びついたと考えられる。また、班での相談活動を通しての個人の発表（質問）だったので、比較的自信を持って発表できていた。

発表の中には文法的に不正確なものも見られた。また、生徒が考えた疑問文がいったい何を聞きたいのかわからないこともあった。確認すると「学年所属を聞きたかった。」とのことであった。このことから今回の場面設定と質問内容の想定が不十分であった部分だと考えられる。しかし、今質問したいことは何かということを生徒なりに考えての発言であるので、「技能としての表現能力」ではなく、「思考・判断の状態、経過の表現能力」として捉えると有効な面もあると思われる。

このことから、「生徒が表現したいと思うような場面設定をすることで、知識・理解を活用した思考を促し、より豊かな表現を引き出すことができる。」という本研究の目標はある程度達成されたと思われる。

9 成果と今後の課題

今回の研究で、表現したいと思うような場面設定をすることが、生徒に知識・理解を活用した思考を促し、より豊かな表現を引き出すことができるということがある程度見えてきた。しかし同時に多くの課題が明らかになった。

１つは場面設定が詳細において不完全であったことである。積極的な姿勢は引き出せたものの、疑問文を考えるのに時間がかかる班もみられ、このことから発表の機会が全員には確保されなかった。質問に関しての条件設定を見直すことや、辞書や語句集などの補助教材を増やすことが必要である。

次に、今回のような場面設定を１回で終わらせては生徒の思考力・判断力・表現力を高めることはできない。他の言語材料においても表現したいと思わせるような場面設定を継続的に行う必要がある。単純なインフォメーションギャップを用いた会話活動にさらに工夫を加えることで、生徒の意欲を引き出したい。また、正確で

豊かな表現を行うためには、地道なインプット活動を欠かすことはできない。単元序盤の単語の暗記などのインプット活動と、単元終盤の表現活動とが結びついているという意識を生徒に定着させることで、語彙の習得などに対しての意欲も引き出したい。

最大の課題は、授業者自身の評価規準の理解が不十分であったことである。「言語活動での生徒の思考・判断を見取るための表現」と「英語として正確な表現」は異なる。「新しい学習評価についてのガイダンス」には外国語科の評価の観点とその趣旨として、「外国語表現の能力 － 外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。」と示されている。

他教科を含め全ての教育活動において求められる「言語活動が目指す表現の能力」と「外国語表現の能力」を曖昧に混同することなく、整理して授業作りをしていかなければならない。

参考文献

○ 中学校学習指導要領解説外国語編 {文部科学省}
○ 中央教育審議会・平成２０年答申 {中央教育審議会}
○ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料 {国立教育政策研究所}
○ 新しい学習評価についてのガイダンス {福岡県教育委員会}